

アクバル箴言集（四）

近 藤 治

《二三八頁》

（二四二）ハーフィズのカザル（抒情詩）をすべて書き取った後に、ウマル・ハイヤームのルバーイヤート（四行詩集）を書き写すべきである。さもなければ、それ（ルバーイヤート）を読んでも、ガザク（酒の肴）なしでワインを飲めというようなものである。

（注）ハーフィズは十四世紀の抒情詩人。ウマル・ハイヤームは十一―十二世紀の四行詩人。いずれも著名なイランの詩人。英語版・ウルドゥー語版ともに後半の文章中の「それ」をガザルと解しているが、原文を見る限り本文のような訳が適当であると思われる。それに、ガザク（ghazak）は酒を愛でたハーフィズのカザル（ghazal）にかけたことばと考えれば、ガザルを書き写した後にルバーイヤートを読むべしという文意が一層はつきりとしてくる。

（二四二）人々は偉人の名を（自分の）子息につける。たとえ吉祥の願いからきているとしても、誉めたことではない。輪廻転生（tanasukh）を信じないイスラーム法学者たちがこれ（偉人の名の命名）に現を抜かし、一方輪廻転生を信ずるインドの人々が自制しているのは、驚きである。

(一四三) 宗教的義務を免除されている幼児たち (khward sal) 大英図書館蔵写本、ラクナウ版刊本ともに khward salan) に割礼を施す習慣を止むをえないものと人々が考えるのは、実におかしなことである。

(注) 大英図書館蔵写本もラクナウ版刊本もこの箴言と次の箴言の順序が入れ替わっており、そのためであるがウルドゥー語版の順序も同様に入れ替わっている。

(一四四) 豚〔の食用〕を厭う原因が不浄であるとするならば、ライオンやこれに類するもの〔の食用〕は法になつたものであつたはずだ。

(一四五) 〔死者に〕経帷子を着せるのは、昔からの慣わしである。そうでなければ無へと旅立つ者がどうして荷を運ぶことなどあろう。〔この世に〕生まれてきたのと全く同じように〔無一物で〕帰っていくのがよい。

さる日、クリージュ・ハーン (アクバル時代およびジャハーンギール時代初期の貴族で、財務長官やグジャラート総督、ラホール総督等を歴任した人物) が一冊の帳簿 (ダフタル。彼の財務長官時代へ一五八一―八二、一五九二―九四年) の地租徴収の基本に関する最も重要な書類の束であろう。を皇帝の御前に持参し、言上していうには、「この帳簿にフラーサトゥルムルク (khulasat al-mulk 帝国要覧の意) と名付けました。ご諒承賜りますように」と。「皇帝は」次のようにお述べになった。「この名称は州や県、あるいは町 (qasba) にはふさわしい。しかしハキークアトゥルムルク (haqiqat al-mulk 帝国の実情の意) と呼ぶ方がはるかによいであろう。」クリージュ・ハーンは自らの賢明さを際立たせていた。ある者たちは、彼とは別の考えを述べるがあつた。彼らの間で数学のことが話題となつた。(クリージュ・ハーンの反対派は、財務長官職にとって数学に明るいことを必須の条件であると主張しなかつたのであろう。) 彼はそれについては沈黙を守り、宗教のことに固執した。

皇帝のことは次の如くであつた。対句。

「汝は地上の仕事をよくなせり

天上のことをもよく果さんか」

(注) この項の文章と、次の二つの項の文章とは、通常の箴言の書き方と異なつて、冒頭が「お述べになつていた」*«mi-farmudand»*で始まつていない。そのために、これら三つの項の文章中のアクバルの言葉は「」のなかに入れることにして、説明の文章と区別することにした。ラクナウ版もウルドゥー語版も、これら三つの項の文章を直前の箴言の通し番号に含めて記している。この訳文においても、同様の方式をとることにする。

さる日、知恵の〔程を示す〕会合 (*baam-i-aggah*) が開かれた。皇帝列席のこの会合にいた詩人の一人が、次のような対句を詠み上げた。対句。

キリストを友とし、エリヤ (紀元前九世紀ごろのヘブライの預言者) を道案内、ヨセフを同行者とするは
おゝ、わが太陽とてこのような榮譽を受けるであらうか

皇帝は次のように言われた。「わが太陽という代わりにわが勇士と詠めば、なおよかつたであらう。」〔その場の〕賢人たちは拍手喝采した。

さる日、ハキーム・アブルファアトフの哀悼とハキーム・フマーム (この二人の兄弟はイランのギーラーン地方出身で、アクバルの信任厚い廷臣。兄のアブルファアトフはアクバルの治世第三十四年に死去。) の帰還の歡びをうたつたムッラー・ターリブ・イスファハーニーの四行詩 (*rubai*) が皇帝の御前で詠まれた。四行詩。

我が二人の兄弟の愛はなんと親密なことよ
一方が旅に出れば、もう一方は旅から戻る

一人が立ち去れば、その後を追つて〔我が〕命は萎えてしまい

いま一人が帰れば、我が萎えし命は再びよみがえる

〔皇帝は〕次のように言われた。「その後を追つて (ba-dunbāla-yi) という言葉は重すぎる。次のように詠めば、もつとよからう。

一人が立ち去れば、その旅立ちゆえに (z rafanash) 我が命は萎えてしまい

詩人たちにとっては歓喜のひとつであつた。

《二三九頁》

(二四六) 誰彼かまわず頼みごとをするのはよくない。とりわけ高潔な志をもつ高貴な氣質の人々に頼むのは。なぜなら、こうした人々はやむをえないとき以外は手を汚さないものだからだ。それゆえ、こうした人々に頼み込むのは、自分自身の名誉と彼らの名誉とを損なうものである。

(二四七) 才能に違いがあるのは、人類が永続する源泉である。

(二四八) 真理なることばは何かといえ、それは耳に届いた後に心に染み透るものである。早呑み込みはどうしようもない。

(二四九) 幼児たちの重い病氣は、輪廻思想の一端を物語っている。

(一五〇) 古の何人かの罪人たちが猿や豚の姿になったと天啓書が述べているのは、信じていいことだ。

(一五一) いくつかの造られた形のものに「人間の」魂が移されるとし、しかもこれは避けられないことだというように考えるならば、それはまことに願ひ下げにしたい考え方だ。そうではなく、運命の魔力が鉱物、植物、動物へと段階的に「人間の魂を」移していき、ついには高貴な段階へと引き上げていくのであれば、何も驚くことはない。

(一五二) 古人たちは次のように言っている。各人の受ける罰は幾つかの姿を通して現われ、各時代の報いはこのようにして償われていくのである、と。これは先ほどの言を確認するものである。

(一五三) 燭台に火を点すのは、太陽の記念 (ba-yādī aṭṭāb ラクナウ版は「太陽の威厳」 shānī az aṭṭāb となっている。) に役立てるためである。何人にとつても、太陽が沈んでしまうと、燭台に火を点さなければ何ができようぞ。

(一五四) 煙の黒色は、光の欠如と煙自らの無益さによる。

(一五五) 死ぬ時が近づいてくると、やや沈鬱が生じてくる。その時に臨むと、失神さえも引き起こす。このことは、命を失うことと回復することが神の力に帰していることを実によく示している。

(二五六) 耳は音の見張番である。語り手が聾者になれば、彼は〔語る〕意図をなくしてしまう。

(二五七) 窃盗は知恵が身につき始めた時や年をとってから行うと、確かに密通より悪いけれども、しかしながら、この忌まわしい行い(密通)をなす者は自分自身とともに他人をも重大な罪で汚すので、やはり一層罪深いといえよう。

(二五八) 自己の胃をば動物たちの墓場となすのは、褒めたことではない。

(二五九) 無実の者を殺すのは、彼に目潰しを食らわすようなものであるが、彼は神の慈愛に与ることになるのである。

(二六〇) 人を殺すのは、自らの命を差し出す者にこそ相応しい。理性の命ずるところに従ってこのことを果たすものは誰でも、神と帰一するのである。

《二四〇頁》

(二六一) 娘がいるにもかかわらず、遺産が父方の甥(‘amzada)に伝わるのは、〔その遺産がもともとは甥の〕父から死者(娘の父)に伝えられていたものとすれば、納得できる。さもなくば、どうして適切といえようか。

(二六二) 都市(shahr)とは、様々な職人が住んでいるところということができし、また、夜普通の声では居

住地の端まで届かないほどに人々が住みついているところ、ということもできる。

(一六三) 川 (darya) はいつも (hama sala ラクナウ版はhama sal) 流れているものである。

(注) 「流れる」 (rawad) は別の読み方で「川」 (rud) となる。この場合、「川はいつも川である。」という意味になる。アクバルはトートロジーの面白さにかけて、このことばをいったのであろう。

(一六四) 国々は、川や山や荒野や言語によって、互いに分かれている。

(一六五) カールやカシュミールのような寒冷地域では、マスケット銃 (banduq) (の銃身は)、乾燥と寒気で破裂しないように、やや太目に作らなくてはならない。

(一六六) 風が適度であるかどうかは、風車と舟によって異なる。しかしながら世間の常識 (zaban-zad) では、灯を消す程の風をいう。

(注) ラクナウ版は、この箴言から番号を一つ飛ばして一六七としており、以下一つずつずれている。

(一六七) 夢判断 (ta'bir) は吉凶占いの世界に属す。この故に、夢は善良な思考をもつ学者に対して以外、それが吉祥 (fal-i-neku) をもたらすまでは、告げないのがよい。

(一六八) 雄弁とは、言葉が聞き手の程度に応じて使用され、多くの意味が簡潔な表現に込められながら、理解の

上で誤解の生じないものである、といえよう。また能弁とは、陳述において言葉に淀み (ka-j-maj) のないことをいう。

(一六九) エジプトの辺境王 (marzban ファラオのこと) とフサイン・マンスール (Husain b. Mansur 八五七—九二二年、アラビアの神秘主義者。通称ハッラージ Hallaj 「我は神なり」 ana al-haq と言ったこと有名) から、一つの教訓がえられる。すなわち、自己を見つめること (khud-bini) と神を見ること (khud-nigari) とはそれぞれ別のものである、という教訓である。

(一七〇) 威厳は「自己の」立場の鞏固さによつて生ずる。

(一七一) さる学者がハゲタカの長命と鷹の短命について尋ねられた。彼が答えるには、前者は動物を傷つけないのに対し、後者は動物を捕食するからである、ということであつた。

(一七二) 鷹は動物以外を食べないことに対して短命の罰を受けるというのに、人間は多くの食料がある上に肉を食べることを我慢できないのは、一体どうしたことであらうか。

(一七三) 確かに、攻撃性のあまりない動物「を食べること」は適法 (halal) とされ、猛獣「を食べること」は不浄 (haram) とされることのなかに、深い考え方が示されているようだ。

(一七四) ことばを覚えるのは共同生活によつて起こってくる。さもないければ、誰もことばを話せないままに止ま
つていよう。

(一七五) 啞と一緒に過ごすという実験をしてみると、見知らぬ者同士がどうにかして意を通じるよう
になるまでに、いつまでそうした状態のまま沈黙が続くか明らかとなる。

(注) ラクナウ版にはこの文章が欠落している。ウルドゥー語版では、この文章は一七三の箴言に含められ、
独立した箴言として扱われていない。従つてウルドゥー語版の箴言通番一七五以下は、邦訳の通番一七六以下
と対応する。

《二四一頁》

(一七六) 何人も〔他人に〕神罰が下るよう呪う者は、〔神に〕聞き容れられることはない。この深遠な事実によ
つて、呪いをかけられた者には安らぎがある。

(注) ラクナウ版の番号は、この箴言からこの邦訳の通番と再び一致する。

(一七七) 硝石を混ぜるようになってから、水中にも忠誠 (haq-i namak) を認めるようになった。

(注) 水を冷やすために硝石 (硝酸ナトリウム) を入れると、塩分 (namak) が水中に浸み出るが、そのナ
マクを忠誠 (haq-i namak) のナマクとかけながら、自己の威信が陸上のみならず水中にまで拡大したとシャ
レを飛ばしたもの。

(一七八) 余がインドにやってきたとき、余の心は象に引きつけられた。この類い稀な強力〔の動物〕に意を用いれば、あらゆるものに対して勝利を得ることが約束されている、と思った。

(二七九) 人間は肉食にすっかり慣れていたので、苦痛がなければきつと自分自身に鋭い爪を向けたことであろう。

(二八〇) 願わくば、余の肉体が肉食者たちの欲求を叶えてやれるほど丈夫に出来ていて、これ以上狩猟がなされなくなればよいものを。あるいはまた、彼らの食用に〔我が身を〕少し切り取れば、その代わりに再び〔肉が〕生じてくれればよいものを。

(二八一) 願わくば、象〔の肉〕を食べることが適法であればよいものを。そうすれば、一隻の象がどんなにも多くの動物の身代わりとなることであろうに。

(二八二) 面倒な生活を意に介さなければ、余は人々に肉食を禁じたいものだ。余自信が〔肉食を〕すっかりやめてしまわないのは、多くの人々が〔余にならつて〕自発的に、あるいは不承不承に (kam-na-kam)〔肉食を〕やめて、哀しみの墓場 (tangna-yi gham) に苦しむことがあつてはならないからである。

(二八三) 物心がつき始めたところから、余が動物〔の肉〕を食事のために用意するように所望しても、さしておいしくはなかったし、欲求を満たしてもくれなかった。そのことが動物保護の指導者たることを教えてくれ、また生き物を食することを手控えさせてくれた。

(一八四) 人々は、毎年〔余の〕登極月 (mah-i walayat 西暦では一五五六年の二月) には肉食をしてはならない。神への感謝を果たし、一年がめでたく (ba-guzidag) 過ぎ去るようにするためである。

(注) ラクナウ版はこの箴言にも一八三の番号を付している。従つてこの箴言からラクナウ版は邦訳通番よりも一つ若い番号を付けている。

(一八五) 肉屋や猟師など殺生 (jan-shikari) の他に職をもたない者たちは、その居住地 (pun-gan) を他の人々から隔離すべきであり、〔人々と〕交われば罰金 (tawān) を課すべきである。

(一八六) さる商人の死期が近づき、彼の四人の息子たちが財産をめぐつて諍いをはじめた。彼は〔四人の息子たち〕全員によく諭した後、次のように語った。「熟慮の結果、私は財産を均等に分かち、それを家の四隅においておいた。私がこの世から旅立つた時には、各自がそれぞれ一つずつ手に入れるように。」遺言が実施に移されたとき、一人は金を手に入れ、二人目は穀物を手に入れ、残る二人は紙 (カルカッタ版は *paper* となつてゐるが、*kaghaz* の間違ひ) と骨 (*ustukhan*) を手に入れた。彼らは〔その意味するところが〕会得できず、困惑してしまつた。インドの国王サーリヴァーハン (*Salibahan* シャカ紀元〔西暦七八年〕の創始者シャーリヴァーハナ *Salivāhana* またの表記はサーリヴァーハナ *Salivāhana*) は次のようにいつた。「骨は一方に家畜を与える印であり、紙はもう一方に信用を与える印である。」計算してみると、それぞれ四人の分け前は均等であつた。

(一八七) ハサン・サッバーフ (一一二四年没。イスマール派のうちのニザール派の指導者。イランのアラム

ート城を拠点にして、いわゆるアサッシン教団の活動を指揮）は大勢の者たちと航海していた。突然、嵐の恐怖が襲つてきて、人々を動転させた。彼は快活で泰然としていた。「航海の安全について」質問を受けると、彼は大丈夫との約束を与えた。《二四二頁》 海岸に到着したとき、すべての者たちは彼の隠れた知力を確信した。

「彼の隠れた知力というのは」実のところは、神の意志は一貫しており滅裂に至ることを欲してはいない、という知恵から生じたものであった。「嵐から」救われるという吉報を下した判断は、次のような考えによるものであった。すなわち、もし全滅の大波に会えば「誰もそれに」巻込まれるし、そうでなければ単純な輩たち(sada-laiban)は「自分を」称賛する方に靡いてくることになる、と。

(注) この箴言は、航海中嵐に会つて全員が死亡すれば、彼の予見の間違いを指摘する証人もいなくなるし、無事に嵐から脱出できれば人々の称賛をかちえられるとのハサン・サッバーフの考え方のしたたかさを衝いたものと思われるが、英語版、ウルドゥー語版とも文意が判然としない。

(一八八) アリー、またの名ハールワー (Kharwā ラクナウ版、ウルドゥー語版はKhara) はよく口にしたものだ。バリアー (Balīa 大英図書館の BL Add. 7652 写本、ラクナウ版、ウルドゥー語版はともにマリーバール Malbar となっている。) では、上半身が二つあつて頭と眼と手が別々になっておりながら下半身が一つの人間がいて、家庭を持ち金細工を営んでいるのを見た、と。

(一八九) バイラム・ハーンがヒジャーズ(メッカ、メディナ等が位置するアラビア半島北西部地方。彼のメッカ巡礼の名目には、ヒジャーズ地方の学者たちにアクバルからの下賜金を届けることが含まれていた。)に向けて発つ許可をえた年(一五六〇年、バイラム・ハーン失脚の年)に、シカンドラ(アーングラの北西約二〇キロメー

トルに位置する町。後にアクバルの廟墓がここに建設される。の近くで一頭の雌鹿をチーターが捕えた。生きた小鹿がその腹から出てきた。余は自ら肉を骨から分けて、チーターにたつぷりと与えた。何かが余の手に触れた。余は骨のかけらかと思つた。調べてみると、雌鹿の肝臓から鏝が現われた。きつと若鹿のころ矢に当たつたのだ。神の保護を受けて命に別状はなく、丈夫になつて妊娠するのに障りがなかつたのである。

(一九〇) ねずみは鳥の卵を胸に抱いて、仰向けになつて寝る。他のねずみたちは、そのねずみの尻尾をくわえて巢穴へと引っぱる。また自分の尻尾を回して瓶のなかに入れ、阿片その他を取り出す。ねずみのこのような知恵は沢山ある。

(一九一) 狼が口を開けようとするのは〔獲物を〕捕らえようとするときである。そうでなければ、どんなことがあつても開けようとしな。捕獲されても声をたてることはない。

(一九二) 石と岩塩は、前者は水に溶けないのに対し後者は溶けることによって区別される。

(注) 「石と岩塩」のところはテキストで sang u mang となっているが、英語版第二版を編集したジャドゥナート・サルカールは nang (賽子) の綴りを namak (塩) の綴りの間違いと解釈しており、ここではそれに従つた。大英図書館蔵写本、ラクナウ版は共に sang u mang となっているが、英語版初版の訳者ジャレットはこれに mineral and vegetable matter という訳を当てはめている。ウルドゥー訳は全く意味を取り違えている。

(一九三) ある日狩猟区で、おとりの鹿が野性〔の鹿〕と角を突き合わせ、首尾よく野性〔の鹿〕は捕獲された。見物人たちのある者は、次のような半句を詠んだ。

走ってアーフー(アーフー) 鹿を捕らえた者いまだ見ず

これは次のようなことを意味している。アーフーはペルシアでは不名誉をも指すゆえに、〔態々〕苦労や努力をしてそれを求めるまでもないのである。

(一九四) 幼児を結婚させるのは、神の意に叶ったことではない。なぜなら、この行い(結婚)によって期待されているものからはるかに遠く、多くの害悪と隣合せになっているからである。しかも女性が再婚しない慣習のもとは、きわめて厄介なこととなる。

(一九五) 見知らぬ者たちの間の結婚は、他人同士が親戚関係を結ぶようになるために望ましいようだ。いかに遠縁の親戚でも、結婚によって一層親しいものとなる。アダムの時代には人々に息子や娘が生まれると、ある者の息子は別の者の娘と妻合わされた」と記されているのは、いささかこの点について示唆している。

(一九六) 父方の従姉妹との結婚といったイスラーム教に適合的な制度は、実はアダムの生誕時代のような〔極く〕初期のころから既にあったものようだ。

《二四三頁》

(一九七) 欲情に従って女に近づくのはよくない。そのことばかりが頭にあると、生命の泉は彼自身のなかで枯竭

していく。

(注) これ以下四つの箴言は、英語版初版では省略されており、同一版では編者が簡単な概要を示すのみである。

(一九八) 幼い女に近づくことが自らを神の不興下に置くものだとなれば、まさに同様に、子供を産まなくなった、五五歳を過ぎた老いた女に近づくこともまた容認されない。

(一九九) 妊婦と交わるのは神の御意にかなったことではない。精液が無駄となり、精神が破滅に傾き、胎児と妊婦にも害毒をもたらすこととなろう。

(二〇〇) 月経のときにも、女と交わるのは差し控えるのがよい。古人たちの抱いた嫌悪感が、そのときの女には多少ともあるからである。

(注) ヒンドゥー教の伝統的な観念では、経血は不浄視される。

(二〇一) 一人を越える妻を求めるのは、我が身に大変な苦勞を課することになる。「一人目の妻が」生まず女であるか息子がない場合には、「二人目の妻を娶る」余地がある。

(二〇二) 人民は余の子供に当るということが今より以前に分かっていたならば、余の帝国からは誰も後宮に入れなかったであろう。

(二〇三) ヒンドウスターンの女たちは、かけがえない命を実に低く評価されている。

(二〇四) インドには、妻が夫の死後いかに厭であつても我が身を夫の火(荼毘)に投じて自らの尊い命を欣然として捧げ、それをもつて夫の救済の手立てであると見なす、古くからの習慣がある。妻の献身によつて己の救済を手に入れようとする男どもの心根の何と驚くべきことよ。

(注) 英語版は「妻の献身」以下の文章をあたかも別個の箴言であるかの如く扱っている

(二〇五) 皇帝権はまことに最高の賜物である。「世の中の」あらゆる行いが適切であるかどうかは、皇帝の裁量の範囲内におかれている。神に対して皇帝が捧げる感謝は正義の執行と正当な評価(によつて示されるの)であり、また臣民には「皇帝に対する」恭順と称賛(「が求められる」)。

(二〇六) 皇帝の姿をみることは、神への崇拜からきていると考えられてきた。皇帝は伝統的に神の影(imagined)と呼ばれている。確かに、皇帝を目にすることは神を心にとどめる手立てであり、神の保護をえることであるとしば言われている。

(二〇七) 皇帝権はとてつもなく大きな「神からの」賜物である。広範な人々にその益するところが還元され、救済をえた人々の恩恵が広く行き渡るようにしむけるからである。

(二〇八) 臣民ができる仕事を皇帝自らが行うべきではない。他の者たちが犯した過ちは皇帝が処置できるが、皇帝自らの逸脱は誰が正すことができるか。

(二〇九) 皇帝たることは事物の度合を知ることであり、その程度に応じて恩賞と刑罰を用意することである。

(二一〇) 事物の度合を知することは、幸福の探求を莊嚴するものであり、物事を成就する元手である。

(注) ウルドゥー語版ではこの箴言が欠落している。

(二一一) 皇帝の臨席が信頼と平穩をもたらすといわれていることは、真実の謂である。鉱物も植物も特別の性格をもっているという。ならば選ばれた人間として、特にその人の行いが世の人々の見張り役であるといつてどうして間違いないか。

《二四四頁》

(二一二) 支配と服従（の關係）において恐怖と期待は、混亂が終息し美德が再び姿を現すために避けえないことである。しかしながら、權力をもつ者は激情に駆られて輕率に走ることなくこれを行使し、各人の持場を細心に考慮するものである。

(二一三) 恐怖と期待をもつて歩む者は、誰も自分の精神世界と現実世界 (din u dunya) が豊かになっていく。破滅は怠慢によるのだ。

(二一四) 情情は不面目のはじまりである。幸福追求の道は、「各人が」仕事の術を学びそれをとことんやり遂げることである。「かくすれば」監督官 (darogha) は監視の眼をそらすことができなくなる。

(二一五) 君主の怒りは、その慈悲と同様に世の繁栄の元手である。

(二一六) 何人にとつても乱暴は許されることではない。世界の番人 (pashā-i-jān) である皇帝にとつてはなおさらである。

(二一七) 命令を下す者 (君主) に対する崇拜〔の根拠〕は「君主による」正義の実施と世界の莊嚴〔に由来するもの〕であり、束縛を受けぬ者 (君主) に対する崇敬〔の根拠〕は「君主における」心身の一体化に求められる。すべての争いは、人々が自分の立場を正当化して、別々の行いに没頭するところから起こる。

(二一八) 皇帝は四つのことがらを差し控えるものである。狩りのしすぎと、延々と続く遊戯と、四六時中の酩酊と、女との過度の交わりである。

(二一九) 狩りにはさまざまな統治上の考え方があてはまるものだが、何といつても第一は、生命を断つことが道理になつてゐるかどうか、という点である。

(注) 英語版初版でジャレットがこの箴言を「狩りは国家の政策との類似性を示しているが、にもかかわらず

第一に考慮すべきは生命の破壊に対して寛大であることである」と訳している (1st edition, Vol. III, p. 399) ことに對し、第二版を担当したジャドゥナート・サルカルは「狩りは王の行為との類似性を多く示すものであるが、なかならず第一は「死の宣告を受けた者への」助命が慣習となつてゐることである」と改訳し (2nd edition, Vol. III, p. 451)、注記でその根拠を、ムガル朝皇帝たちが狩りの際に狩場の円形包囲網 (qamar-gah 彼は qamurgha としてゐるがこれは誤植) を解いて鹿たちを逃がしてやつた事例が多くあることに求めている。一方ウルドゥー語版では、「狩りにおいては無数の考慮を払いながら行わねばならないが、第一に留意すべきは、生命を絶つことが規範に則つてなされているか、ということである」としている (Vol. II, p. 371, No. 216)。ペルシア語テキストを虚心に読めば、むしろウルドゥー語版が原意に近いといふべきであらう。

(二二〇) 嘘つきはあらゆる人々にとってよくないことであり、皇帝たちには最も不相応なものである。嘘つきの皇帝も神の影といわれようが、影として真つ直ぐであるべきだ。

(二二一) 監督官 (dārogha) たちは、「(世の人々が) 何人も欲に駆られて自らの仕事から離れることがないよう、視察の目を注ぐべきである。

(二二二) イランの国王のシャー・タフマースプはある晩、詩の半句が思い出せなかつた。灯^{あかり}持ちがそれを詠み上げた。国王はその召使に軽い懲罰を与え、次のように言つた。使用人が学問に耽るようになれば、どんなに多くの仕事も途中で遣り過ごされることにならうぞ、と。

(注) ラクナウ版は *farmūd* で始まる後半の文章を *ni-farmūdand* (「お述べになられたものである」の意)

で始め、アクバルの別個の箴言として扱い (Vol. III, p. 308) 、ウルドゥー語版もそれと同じように別個の箴言としている (Vol. II, p. 371) 。しかし邦訳の底本としているベンガル・アジア協会版のように、後半の文章は同一の箴言を構成するシャー・タフマースプの言とるのが自然であろう。なお、大英図書館蔵写本 (Add. 7652, f. 437a) は底本が…lakhti malish dad. farmud…とつづいてることを…lakhti malish dada. farmud…と記して、全体が一つの箴言であることを明示している。訳はこの写本に従って行った。

(二二三) 皇帝は近侍者たちと笑ったり戯れたりして、常日ごろ馴れ親しむものではない。

(二二四) 皇帝は絶えず征服の準備をしておくべきである。さもなければ、近隣の者どもが傲慢になって反抗に打って出るからである。

(二二五) 軍隊は絶え間なく軍事行動につかせるべきである。訓練不足によって〔彼らを〕放縱に走らせることがないようにするためである。

(二二六) 皇帝は人々の財産と生命と名誉と宗教を保護する際に、区別を設けるものである。貪欲と激情によって見境の効かなくなつた者どもが忠告を聞かなければ、懲罰に付すまでだ。

(二二七) 何人も皇帝たちを語るに礼節をもつてしない者は、間違ひなく非難を受けるか軽蔑される。

(二二八) 皇帝のことばには真珠の裁可が含まれている。しかしそれがいずれの聞き手にも「真珠の」耳飾りとなるというのではない。

あとがき

本稿は、アブル・ファズルの『アクバル会典』第五部に収められたアクバルの箴言集の後半の部分を日本語に訳出し、必要と思われるところに最小限の注記を施したものである。私はこれまでにこの箴言集の訳出を試み、三回にわたって追手門学院大学文学部の『東洋文化学科年報』第三号、第五号、第九号に発表した。本稿は四回目の訳出であつて、これによってアクバルの箴言集はすべて訳出、紹介したことになる。

この箴言集は、ムガル朝廷の当番の書記官がアクバルの口から発せられた言葉を当番日誌に書き留めたものなから、アブル・ファズルが『アクバル会典』編纂に際し採録したものであるが、難しい表現を随所に含んでいる。恐らくは、アブル・ファズルが採録するに当って彼好みの修辭によって文語的な表現に磨き上げたものが多いからであろう。しかしながら、これらの箴言がアクバルの考え方や意向を伝えていることは間違いないところであり、これによって彼の人柄や、彼を生み出したインド的近世としての時代特徴を把握するのに役立つことはいうまでもない。

本稿においても、これまでの三回の発表と同様に、ベンガル・アジア協会から刊行されたH・ブロックマン校訂のペルシア語刊本 *Abu'l-Fazl-i Allāmi, A'in-i Akbari*, ed. by H.Blochmann, 2 vols., Calcutta: The Asiatic Society of Bengal, 1872, 1877, Vol. II を訳出の底本にした。本稿中に記したページ数は、この底本のページ数を示している。また訳出に当っては、大英図書館所蔵の良質写本 *British Library, Per.MS.Add.7652* およびインドの

ラクナウから刊行された刊本 *A'in-i Akbari*, 3 vols., Lucknow: Nawal Kishor, 1869, Vol. III と対照しながら進めた。さらに H・S・シャレット訳の英語版 *The Ain-i-Akbari by Abul Fazl-i-Allami*, Vol. III, tr. by H.S. Jarrett, Calcutta: The Asiatic Society of Bengal, 1894, reprint, Osnabrück: Biblio Verlag, 1983 および ジャマナール・サルカールが行った改訂版 *Ain-i-Akbari of Abul Fazl-i-Allami*, Vol. III, revised edition, by Jadunath Sarkar, Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1948, reprint, New Delhi: Crown Publications, 1978 並びに ウルドゥー語版 *Muhammad Fada 'Ali, A'in-i Akbari az Allama Abul Fazl*, 2 vols. in 3 books, Hyderabad: Osmania University, 1938, 1939, reprint, Lahore: Sang-e Mili, 1988 も必要に応じて参照した。

本稿では、箴言の本文中に「」によつて補足語を補い、（ ）によつて原語の綴りや簡単な説明、言い換えを示すことにした。また注記を必要とする場合には、当該箴言の直後に配しておいた。本稿を加え都合四回にわたつて公にしてきたアクバルの箴言集の邦訳は、すべての箴言を再度チェックしなおし、表記法等を統一した上で、いづれ遠からぬうちにまとめて発表したいと考えている。